

枯れ葉の下

1. 泣き目

「冬にバッタが生きていた」と珍しがられるのがツチイナゴで、成虫で越冬する数少ないバッタやキリギリスの仲間のひとつです。枯れ草の下などで越冬していますが、暖かい日などには活動することがありますから目につくのです。

トノサマバッタくらいのバッタで、特徴は泣き目です。写真のように複眼の下の模様が泣いているように見えます。この模様は他のバッタにはありませんからすぐわかります。茶褐色をしていることは、落ち葉の下に隠れていることに関係があります。成虫は6月頃まで見られ、夏には幼虫が現れます。幼虫はほとんどが緑色をしています。泣き目だけは成虫と同じです。クズの葉などを食べて成長するため、こちらは緑色が保護色となっています。ところが、ときには茶色の幼虫が見つかることもあります。バッタ類には色彩の異なる個体が時々発見されますが、ツチイナゴは成虫になるとみな茶褐色型になってしまいます。

暖かい日に活動するということは、休眠状態ではありません。活動してもこの季節は餌となる植物はほとんどなく、エネルギーを消費するだけです。急に天候が変化し隠れる場所が悪ければ凍死することになります。寒暖が繰り返されることは越冬に不利なのです。



ツチイナゴ



ツチイナゴの幼虫

2. アオキの芽生え

寒い時期ですが、雪の解けた場所で写真のような極めて大きく厚く丸い子葉に出会えます。葉脈ははっきりしないのがアオキの子葉です。春に発芽する種子が多いなかで、ずいぶん早いようですが、鳥に食べられて排出されたり地面に落ちてからは10ヶ月近く経っているので、本当は遅い発芽です。2月、緑を背景に目立つ赤くなった実は、他の餌がなくなったヒヨドリなどの鳥に食べられます。アオキの果肉には発芽を抑える物質があり、種子は鳥の消化管を通ることで発芽できるようになります。同時に親とはなれた場所に運んでもらうことにもなるのです。

地上に落ちた胚乳を多く持ち、2cm近くもあるラクビーボール型のアオキの種子は、まず根を出し、次いで胚乳の栄養で子葉を大きくし、10月頃になって発芽を始めます。写真のように、一斉ではない、かなりだらだらとした発芽は、急に条件が悪くてもどれかが生き残る戦術です。アオキの葉が好きなシカにも雪の中では見つからないでしょう。



アオキの子葉



アオキの芽生え